

研究だより NO.44

平成25年度 研究の概要

発刊にあたって	1
研究主題について	1～2
研究の内容	2～3
教科等の研究実践	4～8
総合学習シャトル 総合学習CAN	9～11
研究文化の醸成	12
教育研究発表会のご案内	12

香川大学教育学部附属坂出中学校

発刊 平成26年2月10日

発刊にあたって



学校長 伊藤 裕康

穏やかな春の気配が感じられる時節となりました。皆様にはご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、本校は、社会構成主義を基軸とした学びの在り方について研究を進め、学習指導要領の趣旨の本質について注意深く思考しながらも、新たな時代の新しい学びについて模索し、実践を積み重ねております。

特に本年度は、ここ数年の実践である生涯学習を見据えた「学びの意味化」に着目した学習の在り方とカリキュラムの構築を基盤としながら、研究の主眼を「学びの価値の実感」におき、研究主題を「語り合う中で自己の『ものがたり』をつむぐ」へと発展させました。ナラティブ・アプローチとしての「語り」の研究を継続しつつ、個々の学習者の学びの文脈に沿う学習指導法を「自己物語」の視点から追究するとともに、生涯学習を視野に入れた「学ぶこと」と「生きること」の統合を具現化するカリキュラム構想について再考しております。

本号では、これまでの実践をもとに、研究テーマの概要や目指す学習論、その学習を具体化する方法、支える環境・学校文化などに言及しながら、各教科・領域ごとの内容を掲載いたしました。また、教師が「個々の学習者にいかにかかわるか」を重視し、個々の生徒の学びの個性（認知的個性：CI）に着目した研究を関西大学との合同基礎研究をもとに展開しております。ご一読の上、ご意見やご示唆を頂戴できれば幸いに存じます。皆様には、どうか今後とも変わらぬご指導とご鞭撻を心よりお願い申し上げます、発刊のご挨拶とさせていただきます。

〔研究主題〕

「学ぶこと」と「生きること」の統合 — 語り合う中で自己の「ものがたり」をつむぐ —

1 研究主題について

「『学ぶこと』と『生きること』の統合」とは、学習者自らが学ぶことの意味づけを行ったり価値を実感したりする中で、新たな学びをつむいでいき、自己を形成し、自己実現を図ることである。「すごい」「なるほど」「そういうことだったのか」と、学んだことがこれまでと異なる意味や価値を伴って見えたり、「なぜ?」「どうして?」と新たな問いが生まれたりすることが次の学びへの意欲となっていく。それが既存の知識体系を広げ、深め、新たな自分を見出すことになる。こうした、個の学びをつむいでいくこと、学ぶことの意味や価値の実感を授業の中核に位置づけながら、今期は、次の2点に重点を置いた研究を行った。

(1) 学ぶことの意味の価値の実感を重視する

学ぶことの意味と「価値」は本来、一体化、混在化しているものであるが、厳密には異なるものとらえる。学ぶことの意味とは、対象、他者、自己とのかかわりの中で、これまでの自己の学びを解体し、異なる新しい意味を見出すことであり、理解と変化による知性的な結びつきである。一方、学ぶことの

「価値」とは、結びついた新しい意味を自己に引きつけて内化することであり、感性的な結びつきである。例えば、「関数ってそういう意味なのか」「関数に対する自分の概念が書き換わった」と意味づけするだけでは学び続ける意欲とならない。「 x と y の関係で世界を表す関数ってすごい」「深い関数の世界の中に自分がいるんだ」という自己にとっての価値を実感することが、学び続ける意欲となり、真の「『学ぶこと』と『生きること』の統合」となるのではないかと考え、焦点を当てた。

(2) 学ぶことを文化・社会、歴史、生態的文脈の中に位置づける

授業で生徒が課題に取り組む場合、そこには各教科固有の社会・文化、歴史、生態的文脈が内在している。そうした課題に共同的に取り組み、生徒自身の問いをもってその文化や歴史などを読み解きながら、自分の学びの行為の意味や価値を発見することで、生徒は文化・社会、歴史、生態的文脈と学ぶことを結びつけ、また、自らの存在と過去や未来とを結びつけることができる。社会・文化、歴史、生態的文脈とのかかわりを生徒の学びの文脈の中に位置づけること、教師がその結びつきやかかわりを意識した授業を行うことで、生徒はより「学ぶこと」の価値を実感し、学び続ける生徒の育成につながるのではないかと考え、研究の重点に置いた。

今期は、前回大会までの研究を土台としながら、生徒の語りを質的に深めるため、生徒が「学ぶこと」を「自己の『ものがたり』の生成」、授業を「個々の自己の『ものがたり』がつむがれていく過程」ととらえ、そこへの教師のかかわりについてさらに研究を進めることとした。

2 研究の内容

(1) 自己の「ものがたり」をつむぐ授業

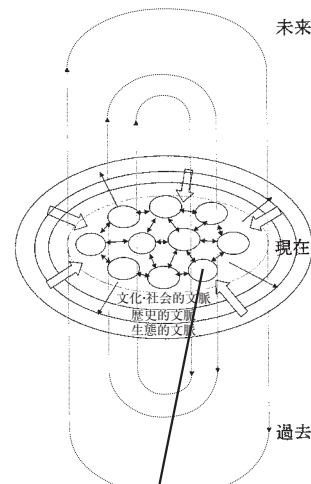
学んだことを意味づけし、価値を実感する生徒を育成する「自己の『ものがたり』をつむぐ」授業づくりの方向性を次のようにとらえた。

生徒一人一人が語る自己の「ものがたり」を足場とし、実証的な根拠に基づきながらも、具体的な学びの文脈の中で生徒自身の過去や未来に関わることを各自に語らせ、それらの「ものがたり」を集団で摺り合い、文化・社会、歴史、生態的文脈と突き合わせていく授業

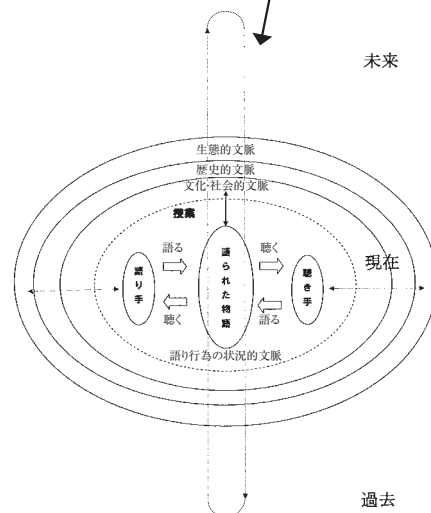
そこでは、次のようなことが求められる。

- ① 教師と生徒、生徒と生徒が「主体—主体関係」を前提とし、対等な関係で語り合うこと。(学びの横軸)
- ② 生徒一人一人が個の学びの文脈に即し、自己にかかわる物語を語ることで「語られていなかった物語に気づき、自己の学びを再構築し、自己理解を図る」内省的なアプローチで学びを創造すること。
(学びの縦軸)
- ③ 生徒が学ぶこと自体が、文化・社会、歴史、生態的文脈への参加であり、それらの文脈と自己との結びつきを強めていくものであること。
(学びの横軸と縦軸の深まり)

1 「語り」(語る行為)と「物語」(語られたもの)を含有する言葉。物語論には様々な考え方があるが、本校は、特に自己にとっての新たな意味づけだけでなく、価値を実感することで自己理解を図り、真の「学ぶこと」と「生きること」の統合を目指す「自己物語」としての学習行為を重視する点で独自に平仮名で「ものがたり」と表記している。



【授業における「ものがたり」の生成】



【語り手と聞き手の共同行為による「ものがたり」の生成】

【授業における自己の「ものがたり」の生成】



【主体—主体関係での対話】



【自己理解を図る内省】

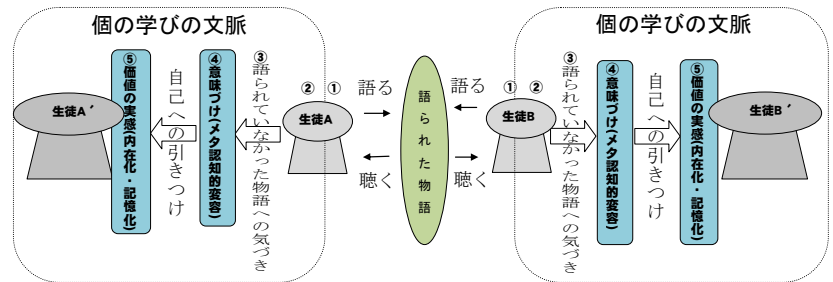


【学びの文化への参加】

(2) 学ぶことを意味づけたり価値を実感したりしていく語りのあり方

価値観や感受性がぶつかり合うような深い語り合いの中では、自己の思いを相手に分かってもらえるように語ることが繰り返し行われる。相手が「よく分からない」「納得がいかない」という反応を示したら言葉を変え、論理や筋立てを変えて語り直すことになる。そうしたやりとりの中で、相手の視点が自己の中に入っていく。また、今まで語られなかったことにハッと気づき、新しい語りを生み出すことになる。相手に分かるように語り直すということは、相手の視点に立って自己の体験を見つめ直すことであり、これまでと違った視点で自己を見直し、語り直すことである。そこに自己の新たな発見がある。深い語り合いによって、自分がもともと身につけていた視点に相手の視点が融合した新たな文脈が自分の中に生成してくる。それによって、自分の経験の意味づけや周囲の状況の見え方が一変する。それは、新たな価値が自己の中に生まれ、記憶化されるということである。

そうした語りの在り方と、語り合う場となるための教師のかかわり方について、各教科・学校保健での研究を進めている。



【自己の「ものがたり」をつむぐ過程】

(3) 認知的個性を活かした学習支援のあり方

認知的個性²を「かかわり」の指標の一つとして共通学習に導入し、生徒一人一人の得意・興味や学習スタイルを学びに活かしていく研究を進めている。現在、松村暢隆（関西大学）の開発した「MI質問紙」「学習への取り組み方タイプチェックシート」により、生徒全員が「自分のMI」「同時—継次処理タイプ」を把握し、それを「CIキーホルダー」として常備することで、自己の才能を自覚し、学びに活かしていく試みを、各教科・学校保健において行っている段階である。

目的としては、次の2点を考えている。

- 生徒側—自己のMIや思考スタイルを「自分の才能」として把握することで、つまづいた課題や苦手な課題にも自分の得意な方法で臨むことができ、意欲や自己肯定感が高まる。
- 教師側—学習全般あるいは特定科目で学習困難な子どもたちの認知的個性を活かして、つまづきや苦手を補い、自己肯定感を高めるような、課題追究やかかわりの方法を提示することができる。



【CIキーホルダー】

2 個人のもつ才能や障害も含めて、様々な認知的能力や学習スタイルを多様な認知発達のプロフィールの一つであるとみなす包括的概念

《国語科》

言語による認識の力をつけ、
豊かな言語文化を育む国語教室の創造
— 語り合いを通して深層の読みを追究するための
個への指導・支援の在り方 —



大西 小百合



川田 英之

国語科では「知覚化—意味化—相対化」という授業方法の研究を積み上げてきた。今期は、言葉を真に獲得していく過程を国語科の「ものがたり」ととらえ、以下の3点に焦点を当てて研究を進めた。

① 「国語科のものがたり」としての授業の構築

言葉を真に獲得するとは、知っている言葉の数を増やすことではなく、自分にとっての言葉の価値を実感し、自己内に位置づけることである。それにより自分をとりまく「世界」を広げ、さらに自分自身をも形成することができる。そのような「ものがたり」を生成するためには、学習者が共同で意味をつくり出すまでの過程が重要である。交流によって「ものがたり」を生成する要因を分析し、効果的な単元構成・授業構成を考究する。

② 質の高い「語り合い」

解釈は個によって異なるが、その差異を他者と共有し理解する中で、気づき生まれ、自分の解釈は深まる。言葉を手がかりに吟味し、多様な解釈の妥当性について検討していく語りのあり方を研究する。

③ 「深層の読み」の追究

語り合いの中で揺さぶられながら、自分なりの切実な「解釈」を生成し、人間の真実や本質、社会観や自然観などに迫る読みを追究する。また認知的個性や思考ツールによる支援の方法についても実証的に明らかにする。



【「ものがたり」を生み出す語り合い】

《社会科》

公民的資質の育成をめざし学びや実感をうみ出す社会科学習
— 語ることを通して、社会的自己物語りを
深めあう共同体をめざして —



笹本 隆志



山城 貴彦

社会科では、「物語り」を活用し、学ぶ「意味」を実感できる効果的な「対話」のあり方と「振り返り」手法を考案し、同手法を組み込み、豊かな社会認識を持たせるための社会科学習を開発することを目的に研究を進めてきた。

社会科の教科目標は、公民的資質の育成である。公民的資質は、「確かな社会認識」と、「その社会での自分」つまり「社会的存在としての自己（社会的自己）」の認識を獲得することにより育成される。ただし、生徒が社会的事象に出会うなかで、疑問をもって、立ち止まるむずかしさや、社会的事象を学習する中で新たな発見したり、創造したりする面白さ、社会的事象に対して、新たな意味を見出していく面白さといった「実感」がうみ出されるような学習でなければ、社会的自己は他者のような存在になってしまう。

そこで、本年度は「確かな社会認識」と、「社会的自己の認識」を獲得するために、「物語り作文」をさらに活用し、「実感」をともなった学習を繰り返すことが、社会的自己物語りを深め、公民的資質の育成に有効であると考え、研究を進めている。



【物語り作文をもとに対話している様子】

《数学科》

数学を学ぶことの

意味や価値を実感できる「数学ものがたり」

— 数学とのかかわりを見つめ直す

「対話」と「振り返り」 —



大前 和弘



中西 健三



大西 光宏

生徒の数学離れが話題になって久しい。PISA2012の結果においても、日本の生徒が問題解決への意欲や、数学を学ぶことへの興味が低い傾向が続いている。数学を学ぶ意欲を育むためには、「数学で学んだこと」の意味や価値を実感し、さらに「数学を学ぶこと」の意味や価値に気づくことが大切であると考えます。

これまで数学科では、実生活に結びつけた「意味化」の授業（2008）、「説明し伝え合う交流活動」（2010）、「振り返り活動」（2012）と研究を進めてきた。その結果、気づきを促す交流やマインドマップを用いた振り返り、レポートを取り入れた問題解決学習などの実践から、自分の思考過程を十分に理解し、多様な交流を仕組むことで学びが一層深まることわかってきた。

今期の研究では、「数学ものがたり」を「数学を学ぶこと」の自分にとっての意味や価値に気づくための一連の内省過程や手段であると捉え、新たな意味や価値に気づくための「対話」のあり方、学習過程における自分の思考過程や自分と数学とのかかわりを見つめ直すための「振り返り」のあり方について研究を進めてきた。また、個々が課題に対する考えをもち、課題と向き合って粘り強く考え続けることができる単元構成や学習課題のあり方についても追究する。



【「数学ものがたり」をつむぐ】

《理科》

科学的な見方や考え方を高め、

理科を学ぶ意味や価値を実感できる生徒の育成

— 「ものがたり」をふまえた

探究の過程における語りを通して —



若林 教裕



鷲辺 章宏

理科では、探究の過程における交流や対話の在り方を検証しながら、単元構成や気づきを促す学習シートの開発を行い、科学的な見方や考え方ができる生徒の育成をめざしてきた。

今回の研究では、科学的な見方や考え方の育成は教科の本質の学びであると捉え、本年度も引き継ぎつつ、新たに「ものがたり」を導入した。探究の過程における有効な語りの在り方を探り、生徒に理科を学ぶ意味や価値を実感させ、理科を学ぶ意欲の向上をめざしたい。

以下に研究の構想図を示す。

【研究構想図】

【本校理科で育成してきた力】：科学的な見方や考え方

科学的な根拠に基づき考えることで、「賢明な意思決定」「多様な見方や考え方」「主体的な問題解決」が可能に
理科の「ものがたり」をふまえ、次の3点を導入

1 素朴概念の把握 2 探究の過程におけるパネル ディスカッション 3 気づきを促す学習記録

【理科の「ものがたり」】

自然事象（学習対象）は変化していないにも関わらず、学習者の考え方や見方（感性）が科学的な原理や法則（知性）を踏まえて、変化したり獲得されたりするまでの語りの過程

理科を学ぶ意味や価値の実感→自ら理科を学ぶ意欲の向上



【素朴概念が覆る体験をする様子】

《音楽科》

音楽のよさや美しさを味わうことのできる音楽学習のあり方

— 思いや意図を語り合う中で自己の「音楽ものがたり」をつむぐ —



可児 智恵子

将来にわたり音楽の美しさにかかわる可能性を広げ、より豊かに生きる力を育くむことが音楽科の「学びの意味」であるにとらえ、前回大会では音楽科の授業を通して、個の学びの文脈づくりをうながすために、言葉や音楽を通して思いや意図を伝え合う活動や振り返り活動のあり方について追究した。本年度は、これらの成果と課題をふまえ、学習者がこれまでの自分と音楽との関係を振り返り、自己の「音楽ものがたり」をつむぎ、学ぶことの価値を実感できる授業づくりのあり方について研究を進めている。

研究内容としては、「共通事項」を支えとして対話により思いや意図を語り合う活動の工夫、自己の音楽観を広げ深めることのできる単元・学習課題の工夫、自己を振り返る「音楽ものがたり」生成の工夫、以上3点を柱としている。

共通学習Ⅰでは、音楽のよさや美しさを生み出している諸要素の働きについて気付き、音楽により喚起されたイメージや感情を語り合い表現にいかす。共通学習Ⅱでは、ねらいに迫る課題のもと生徒自身が課題解決の方法を自己設定して取り組ませる。思いや意図を語り合う活動では、音楽と自分とのかかわりを見つめ直し、自己の音楽観をとらえなおし語ることで、それぞれの「音楽ものがたり」をつむがせ、学ぶことの意味や価値の実感につなげていきたいと考えている。



【レポートで情報を共有している様子】

《美術科》

創造活動の楽しさを見出す美術の学習

— 美術の「ものがたり」をつむぎ、発想を広げ感じ方を深める —



田尾 亜貴

美術科では、創造活動の楽しさを味わうことのできる生徒の育成のために、思いを語り、互いの表現のよさを認め合う活動を授業に取り入れてきた。今回は、自分らしい表現や味わい方ができるよう、カリキュラムの構築や支援の方法を研究している。表現の活動では、思いを表現につなげ、表現から思いを振り返ること、鑑賞の活動では、他と意見を交換しながら、自分の価値意識をもって批評し合うことをめざしている。

創造活動とは、新しいものをつくりだす活動である。表現の活動では、自分の思いを自分の方法で作品に表すことができたとき、鑑賞の活動では、自分の見方や感じ方を大切にし、作品に対する見方が深まったときにその楽しさを味わうことができる。こうして、制作に打ち込む魅力を感じたり、作品をより深く味わったりして心が豊かになったとき、美術を学ぶことの価値を実感でき、学び続けたいという思いにつながる。美術の「ものがたり」をつむぐとは、このような表現や鑑賞という創造活動の過程をさす。

創造活動の楽しさを見出させるために美術科で取り組んでいる内容

- 美術の「ものがたり」をつむぐためのカリキュラム構築
- 内面でつむがれる「ものがたり」の表出方法
- 語ることで深まる自己表現
- 美術の「ものがたり」を広げる空間づくり



【思いを語り「ものがたり」をつむぐ】

《保健体育科》

運動の魅力を実感し、生涯にわたって

運動に親しむ生徒を育成する保健体育学習

— スポーツの持続的実践につながる「ものがたり共同体」 —



長尾 健司 森 由加理

保健体育科では、これまでの研究で、コミュニケーション活動によるネットワーキングや人とのかかわりの中から学びの意味や価値を実感できる保健体育学習を実践してきた。また、単元構成を含めた「対話」の場面設定や「対話」の在り方を工夫することで、生徒の「内省」にどのような変化がもたらされるのか検証し、どのように生徒の中に新しい発見や気づきが生まれてくるのかについても研究を進めてきた。

今回は、これまでの実践をふまえ、スポーツをさらに多様な方向からとらえ、自分とスポーツを語るもの同士がかかわる「対話」が、価値観や感受性がぶつかり合うような「語り合い」となることで、スポーツの世界の奥深さに惹かれたり、魅力的で複雑な意味世界を感じたりする（「価値の実感」）ための、授業のあり方について研究する。

本年度は、「問い」を中心とした教師のかかわり方を工夫して、授業の実践を行い、「正しい」解決から「価値ある」解決を目指した。また、仲間同士が語り合うためにゲームのデータを活用し、分析することでスポーツと知的にかかわる学習活動を行った。さらに、チームプレーの変化が個人の「社会的スキル（CI）」にどのような変化をもたらすかについての研究を進めた。本年度で5年目となる「異学年の交流の学習」は定着しており、積極的にかかわり合う活動が生まれている。



【チームで喜びを分かち合う】

《技術・家庭科》

よりよい生活をめざす態度を育む技術・家庭科教育

— 自己の生活を振り返り、ものがたりをつむぐ —



近藤 てるみ 渡邊 広規

技術・家庭科では、「よりよい生活」をキーワードに継続研究を進めている。前大会では、「生徒が学ぶ意味や価値を感じることが、学ぶ意欲につながる。生徒が学ぶ意味や価値を感じるのは、生活の中で『役に立つ』『学んだことはこういうことだったんだ』と実感したときである。」と考えていた。

今回は、『役に立つ』ことだけが意味や価値をもつのではない。学んだことと自分の生活を結びつけ、これからの自分の生活の仕方、生き方について考え、『ものがたり』をつむいだとき、学びの価値を実感し、学び続ける意欲となる。それは、主体者としての生活者（学び続ける生徒）を育てる。」と考え、研究を進める。

本年度は、意味や価値を実感できる題材・授業づくり、教師のかかわり、振り返りについて研究を進めており、これまでに、「エネルギー変換」「食生活と自立」「消費生活と環境」に於いて授業を実践した。これからも、まず、題材にある価値を教師が再確認することから始め、私たちがあたりまえに感じている今の生活が、どのような歴史のもと、現在に至っているのか、先人の知恵や思いに驚きとともに出会わせたり、今の生活を批判的な視点で振り返らせたり、多様な考えや価値観をもつ者で語り合い、考えをすり合い、自分の言葉で語り直す活動をさせたりして、意味づけしたり価値を実感したりして、「ものがたり」をつむぐ授業を実践していきたい。



【得意な絵をかきながら
自分の考えを説明する様子】

《外国語科》

思考力や感性を拡充する学びの創造

— 英語科における言語活動を通して「ものがたり」をつむぐ —



山下 さゆり



明田 典浩

本校英語科では、これまで4技能（「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」）を総合的に育成するために、Dictoglossという学習方法を通して言語形式への意識を高め、言語活動へつなぐ授業構築を行ってきた。コミュニケーションの場において、生徒は日本語で思考しながら英語での表現方法を吟味し「表現できた」という実感を得る。しかし言語そのものが文化であるため、日本語的思考をそのまま英語に置き換えてしまい、意図していない意味合いで伝わることもある。言語形式だけでなく意味や内容、機能を融合して考えることの重要性に生徒が自ら気づくことで、英語を学ぶ意欲へとつながっていることが明らかになってきた。

英語を学ぶということは英語圏の文化や思想を学んだり、すでに知っている世界を別の観点から読解・把握したりすることである。言語活動を通じた気づきの連鎖によってことばの世界が広がり、それが主体的に英語を学び続けようとする意欲につながっていくと考える。

英語が「分かる」「できる」といった意味の実感だけでなく、母語である日本語を含む言語と文化の多様性とおもしろさに気づき、自分が文化的に豊かになったと感じる価値の実感を目指している。



【お互いの気づきがつながる場面】

《学校保健》

生涯にわたる健康で健全なライフスタイルの確立をめざして

— セルフエスティームの形成をめざした健康相談のあり方 —



高岡 加苗

学校保健では健全なライフスタイルを確立し、より良い健康行動を選択できるために、根底となる「自身をこれでよい (good enough)」と受け入れ、認めていけるような健康教育を実践することが有効な手立てと考え、WYSHプログラムを含む性教育、ライフスキル教育を取り入れた保健学習の実践を継続的に実践してきた。

今回の研究では、保健室を訪れる生徒の様々な心身両面の不調の前に、低下しがちな自尊感情に働きかけ、生徒の自己回復力の向上を促していく個への支援を見直している。生徒は、保健室という独自の空間の中で、養護教諭に様々な想いを言葉にして自己を語る。この語りを共有し、自己を見つめなおす過程において養護教諭がナラティブ・アプローチを試み、その有用性を生徒の自己評価を基に振り返ることとした。生徒は、健康相談後に体調の変化を自覚したり、困った時や悩みを持った時に誰かに相談したいと感じるなどの変容が見られた。一方で、健康相談の中で課題解決に至らず、自己変容が感じられない生徒も見られたが、その背景や理由を見直し支援を振り返っている。また、健康相談がより効果的に実施できるようアセスメントシートを作成し、生徒の現状を把握したり、支援計画や連携の在り方について考えたりする手だてとして活用している。日々の生徒対応を通して、養護教諭が行う健康相談の意味と養護教諭の役割を改めて探っている。



【性教育における対話の様子】

総合学習シャトル

1 平成25年度（4月～6月）の実践

総合学習シャトル（以下シャトル）のねらいは、教科学習における活用と総合学習における探究とをつなぐことにある。総合学習CAN（以下CAN）での探究に向けて、共通学習で習得した知識や技能を活用して探究的な学び方を学ぶ場である。平成24年度からは、シャトルを総合的な学習の時間に位置づけるとともに、教科学習とCANとをつなぐ意味合いをいっそう重視するカリキュラムの整備を進めてきた。しかし、生徒のアンケートから、シャトルでの学びがCANに十分に活かされていない、シャトルの講座の内容が教科学習の発展にとどまっている、といった課題が明らかになった。

そこで、今期はシャトルを「探究に必要なスキルを学び、それらを活用して探究シミュレーションを体験する場」としての意識を、教師と生徒が共有するため、講座内容を大幅に見直した。これまでもシャトルは、「CANでの探究スキルを身につける場」との共通認識はあったものの、同教科ペアの教師による講座では、発想がどうしても教科の枠内にとどまり、開かれた探究の場にならないことが多々あった。また、生徒も「シャトル国語」「シャトル音楽」というように、スキルを身につけるよりも講座の内容への関心や意識が高かった。そこで、異教科の教師ペアによる新たな講座を開発し、教科を超えた探究的な学びの場であるとの構えを全面に打ち出すこととした。また、「今行っている探究活動が、どのスキルを身につけるために行っているか」を生徒に常に明示しながら実践することとした。

基礎編（6時間）から特設講座（2×3時間）、そして実践編（12時間）へと段階を追って学ぶ流れは、昨年と同じである。

25年度総合学習シャトル講座 一覧表

講座	講座内容		有効なMI					
	基礎編で学ぶ 主な探究スキル	実践編で行う 探究シミュレーション	言語	論理	空間	身体	音楽	博物
① 発想！ 爆SHOW！ 仮装大SHOW	・発想する ・表現する ・着眼する ・分析、評価する ・分類する	仮装のテーマを考え、データの分析結果をもとに、テーマの特徴を上手く表現できるように探究していける講座。		○	◎	◎		○
② 集めて見たら… そうだったのか!!	・着眼をする ・発想する ・比較する ・分類する ・関連づける ・表現する	身近なもの・人・ことに着目し、各自でテーマを決め、分類、比較・関連づけを行いながら、わかったことをフリーペーパー風にまとめて掲示する。		◎	◎	○		○
③ 白熱！変数教室	・課題を設定する ・実験を考える ・条件を制御する ・関係を見いだす ・説得する ・データを収集する ・質問する	紙コプターの性能向上のための「変数」を自ら設定し、その探究方法を考えることで、CANにつながる広い分野での研究方法を自然にマスターしていける講座。		○	◎	◎		◎
④ 魅力ある表現を 探り、自ら創り、 発信しよう!	・着眼をする ・発想をする ・比較する ・関連づける ・視覚化する ・伝達する	「香川県の特産物」を県外の人に知ってもらうために表現物であるCMを制作していく。そして、外部発信のためのレポートをまとめる。	◎	○	○	○	◎	○
⑤ 気づき！ 発見！ 身近な世界！	・着眼をする ・発想をする ・比較する ・分類する ・関連づける ・視覚化する	身近にありながらも見過ごしてきたものに気づき、写真に収め、比較・分類、考察しながら文章や言葉とつなげて一冊の本で表現する。	◎	○	◎			○
⑥ 想いを形に 一瞬を物語に 自分を表現	・着眼する ・発想する ・情報を選択する ・視覚化する ・表現する ・分析、評価する	自分が伝えたいテーマから、それにふさわしい物語を考え、素材となる写真や音楽を自分たちで用意し、フォトストーリーを作って表現する。		◎		◎		○
⑦ 不思議発見 生活へ活用	・着眼をする ・発想をする ・分類する ・視覚化する ・伝達する	「生活を豊かにするために」をテーマに、アイトリックの仕組みを使ったものや視覚に効果的に訴えるものを考案し、提案する。	◎		◎			○
⑧ 疑問解決への 架け橋	・着眼をする ・発想をする ・比較する ・関連づける ・関係を見いだす ・伝達する	自分たちの素朴な疑問などを独自調査し、わかりやすく解決していく。その結果を一番効果的な方法でまとめ、公表する。	○	◎				◎



【探究スキルを習得する基礎編】



【探究スキルを補充する特設講座】

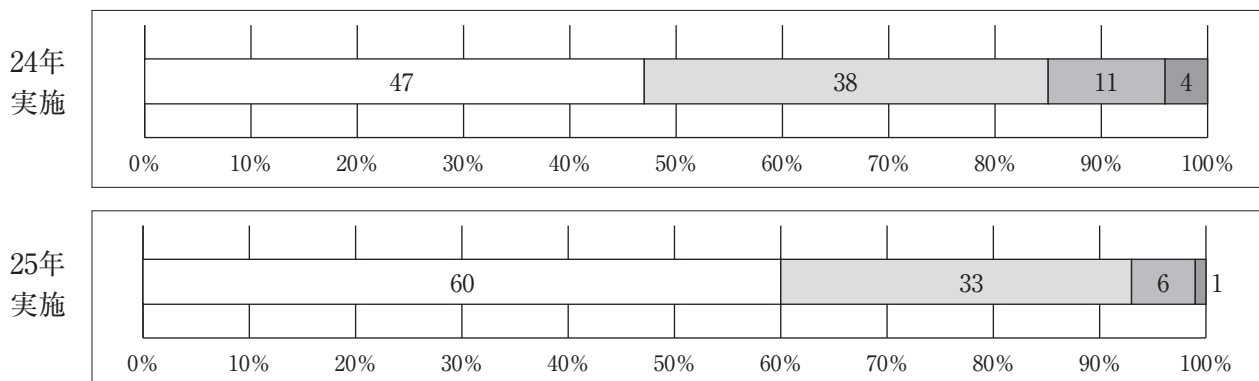


【探究スキルを活用する実践編】

実践後のアンケートの結果、シャトルで学んだスキルがCANで有効だったとする生徒が増えた。シャトルで学ぶのは講座内容ではなく、「探究に必要なスキルである」とする意識が高まったからと考えられる。

生徒へのアンケート ■4 ■3 ■2 ■1 ■0 ■1 ■2 ■3 ■4 ■5 ■6 ■7 ■8 ■9 ■10 ■11 ■12 ■13 ■14 ■15 ■16 ■17 ■18 ■19 ■20 ■21 ■22 ■23 ■24 ■25 ■26 ■27 ■28 ■29 ■30 ■31 ■32 ■33 ■34 ■35 ■36 ■37 ■38 ■39 ■40 ■41 ■42 ■43 ■44 ■45 ■46 ■47 ■48 ■49 ■50 ■51 ■52 ■53 ■54 ■55 ■56 ■57 ■58 ■59 ■60 ■61 ■62 ■63 ■64 ■65 ■66 ■67 ■68 ■69 ■70 ■71 ■72 ■73 ■74 ■75 ■76 ■77 ■78 ■79 ■80 ■81 ■82 ■83 ■84 ■85 ■86 ■87 ■88 ■89 ■90 ■91 ■92 ■93 ■94 ■95 ■96 ■97 ■98 ■99 ■100

【シャトル（基礎編・実践編）を通して、総合学習CANにつながる探究スキルが身に付いた】



2 平成26年度への構想

今後、シャトルも個性をより活かした探究の場にしていくことが求められる。現在、シャトルでは、講座選択の際に探究に有効なMIを示し、生徒はそれを参考に講座を選択するようにしている。しかし、共通学習での認知的個性を活かした学びとのつながりとして、シャトルの講座探究の過程でも生徒が認知的個性を活かしていけるようになれば、シャトルでの学びがCANにおける探究のためのものであるという位置づけがより明確になるだろう。

総合学習CAN

1 平成25年2月～11月の実践

「CAN」とは、Cluster（クラスター）、Action Learning（アクションラーニング）、Narrative Approach（ナラティブ・アプローチ）の頭文字をとったものである。生徒自身が自己の「可能性」を見出していく学習にしたいという願いが込められている。

6年目を迎えたCANだが、CANの時間を心待ちにしている生徒や、研究の楽しさを味わうことができる生徒が年々増えてきている。研究成果発信の場としては文化祭での発表の他、各種コンクールへの応募など、広く校外にも発信することをめざして取り組んだ結果、新聞に掲載されたり、入賞したりするクラスターも現れ、学校の研究文化を象徴する「最高の学びの場」として定着してきている。

本年度実施にあたって改善したのは次の4点である。

(1) マインドマップや概念図をCANで活用

これまで、冬休みの課題として、自分が興味あることや探究してみたいことをマインドマップや概念図などにまとめる活動を行ってきた。しかし、それが有効に活用できていないという現状があった。そこで、1人でテーマを考えていた時間だけでなく、クラスターでもマインドマップや概念図を使って研究を深めていくという活動に変更した。そのことにより、生徒やクラスターの思考の様子が教師や他の生徒からも理解しやすく、行き詰まっている生徒にもより具体的なアドバイスが行えるようになった。



【マインドマップでテーマを追究】

(2) クラスターを組む前の段階でのAL会議（アクションラーニング会議）の設定

1人ではなかなか考えが浮かばなかったり、考えにくかったりするという昨年の生徒の意見から、クラスターを組む前の段階でもAL会議の時間を設定した。同学年同士や、同学年の3～4人グループに、卒業を控えた3年生1～2名が加わる形で行った。3年生は、質問を通して後輩に研究文化を引き継いでいってもらいたいという意識でAL会議に参加していた。

(3) 附中カフェの新設

同じようなテーマで探究しているクラスターや、過去によく似たテーマで探究しているクラスターは多い。そこで、お互いの情報交換ができる附中カフェという場を設定した。AL会議ほど厳格ではなく、あたたかもカフェにいるような安心できる雰囲気の中で対話し、新しい気づきを生み出そうとした。参加した生徒からは、自分たちの考えるヒントが見つかったという意見が多く聞かれた。



【CANランチでの話し合い】

(4) CANランチの新設

CANの時間だけでは研究は進まない。そこで、クラスターが集まり弁当を食べながら話し合うCANランチの時間を設定した。次のCANの時間までにお互いが探究しておくことを話し合ったり、それぞれが行った探究の成果を持ち寄ったりし、生徒からは「もっとCANランチの時間を増やして欲しい」という声が聞かれた。

〈最優秀研究「青雲賞」受賞者へのインタビューから〉 研究テーマ「坂出ゆるキャラ研究所～ゆるキャラ上位から学ぶ～」



Q 研究はどのようにして進めていきましたか？

A 全国のゆるキャラを調べること、市役所と連携を図ること、オリジナルのゆるキャラを創作して発信すること、の3点で進めました。市役所の方からは「坂出ゆるキャラ」の認知度調査を依頼されたり、「3兄弟のゆるキャラを創ってみては」と提案されたりし、それに応えていけるよう研究を修正しながら進めていきました。3人のアイデアを活かしながら進めていきました。

Q この研究は自分にとってどのようなものだったのですか？

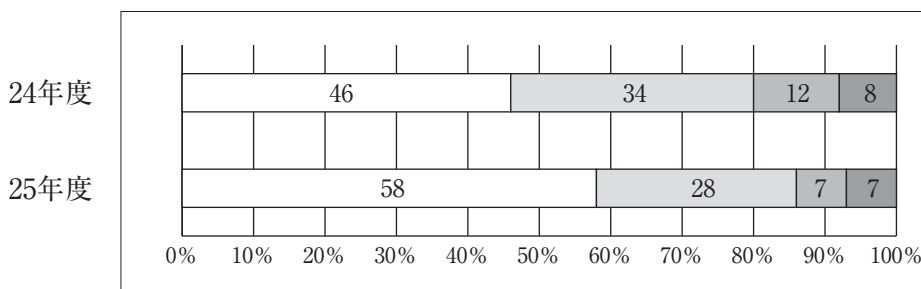
A 私は、今までの研究では本当にやりたい研究ができませんでした。3年間ずっとやりたかった研究を、今年やっとクラスターリーダーとなって行うことができました。だから全力を出しました。自分の一番やりたいことを、とことんこだわってやるのが研究ではないかと思います。

2 平成26年度への構想

昨年度の課題から、CANの時間だけの探究活動ではなく、常に探究し続けられるように附中カフェやCANランチなどを行ったが、さらに自分たちの探究活動について気づき、考え続ける生徒を育成するための新たな取り組みを考えていきたい。

生徒へのアンケート はい □ 4 — ■ 3 — ■ 2 — ■ 1 いいえ

【CANを終えてさらに探究したいことや興味・関心のあることが自分の中に芽生えましたか】



研究文化の醸成

1 大学出前授業

香川大学の各学部の先生を講師としてお招きし、生涯学習、キャリア教育の一環として実施している。本物の研究者から、CANへのヒントをいただく機会となることも期待している。

学 部	講 師	内 容
教育学部	笠 潤平	原子力についてみんなで考える
法学部	平野 美紀	犯罪事件の裏側～犯罪者はどうなる？被害者はどうなる？～
経済学部	大杉 奉代	戦略的思考への招待
医学部	徳田 雅明	地方からでも世界へ発信できる！ 希少糖で世界を健康に
工学部	佐藤 敬子	色でイメージが変わる！ —感覚とイメージのはかり方—
農学部	渡邊 彰	微生物のパワーとそのバイオテクノロジー

2 親子セミナー

前期は藤井浩二先生（坂出市消防本部消防署主幹）より「絆～今を生きてこそ明日がある」という演題で、後期は加野芳正先生（香川大学教育学部教授）より「他者とかわるくこと社会学」という演題で、命の尊さや生き方についてご示唆をいただいた。



教育研究発表会のご案内（第1次案内）



副校長 小林 理昭

この度、下記の日程で、平成26年度教育研究発表会を開催するはこびとなりました。つきましては、是非ご参会いただき、ご指導・ご助言を賜りたくご案内申し上げます。

- 1 テーマ 「学ぶこと」と「生きること」の統合
—語り合う中で自己の「ものがたり」をつむぐ—
- 2 日 時 平成26年6月13日（金） 8：50～16：45
- 3 内 容
 - 全体提案
 - 公開授業（教科、総合学習シャトル）
 - 鼎談「新しい時代の〈意欲を育む〉授業づくり〔仮称〕」
 - 教科、学校保健提案・授業討議
 - 講演 東京大学大学院教育学研究科教授 秋田 喜代美 先生

編 集 委 員

川 田 英 之	若 林 教 裕
大 西 小百合	大 西 光 宏
森 由加理	鷲 辺 章 宏
山 城 貴 彦	渡 邊 広 規

平成26年2月10日

編集 香川大学教育学部附属坂出中学校
〒762-0037 坂出市青葉町1番7号
TEL/ 0877-46-2695 FAX/ 0877-46-4428
E-mail sakachu@ed.kagawa-u.ac.jp